

## 開店披露

### 泉鏡花作

## 全一章

それ此の邊、四季の眺望は、築土の雪、赤城の花、  
若宮の月、目白の鐘、神樂坂から見附の晴嵐。縁日  
あるきの裾模様、左袂の緋縮緬、更けては夜の雨と  
なる。お堀の水鳥、揚場の船、其の八景も一霞、三  
筋の絲の連弾にて、春の幕間く松の内。本舞臺の高  
臺に、鯨ならぬ金看板、老舗が更に新しく新築の開  
店、御料理魚徳と、凧の響にぞ名告りたる。魚よし、  
酒よし、鹽梅よし、最一つ威勢の好い事は、此屋の  
亭主侠勢にして、人間活きたる松魚の如し。其の烏  
帽子も然る事や、蓬萊の床飾、鶴の嘴まなばしの、  
心得はありながら、素袍にあらぬ向顛卷、半纏の捲  
り手に、庖丁の腕を敲く。よし其も見得を忘れ、虚  
飾を棄て、只管お客專一の、獻立献立の心意氣。  
其の割烹御仕出しは正月より、さて引續き建増の、  
梅ヶ香、柳の色座敷、五分も透さぬ四疊半、開くや  
彌生の大廣間、おん對向も、御宴會も、お取持萬端

清らかに、お湯殿もしつらへました。これも皆御鼻  
肩の愈々お庇を蒙りたさ。お心置きなくお手輕に、  
永當々々御入らせを、偏に願ひ奉る、と斯う口上が  
言ひたからう、何と魚徳どうだ、と問へば、亭主割  
膝に肱を張つて、違えねえ、其の通りだ、其の通り  
だ、違えねえと、威張るばかりで巻舌ゆゑ、謹んだ  
口が利かれず、此に於て馴染効に、略儀には候へど、  
一寸代理の御挨拶。

大正九年三月吉日